本門佛立宗機関紙
佛立新聞
THE BUTSURYU SHIMBUN

平成24年9月1日発行
発行所
本門佛立宗宗務本庁
京都市上京区御前通一条上る東堅町110番地（〒602-8377）
電話(075)461-1166（代）
振込口座　京都18650
発行人　藤本日涌　／　編集人　橋口清遠
購読冥加料　一部50円

９月号他ページの主な記事

2面　本山の開導会、11支・日法寺で60周年記念言上
　　11支・正法寺、1支・日風寺 新御講有初のご親教・ご巡教
3面　第6支庁 石巻で追善回向、3支・中部南布 清護寺への訪問助行
4面 5面　特集：第４回青少年の一座 本山宥清寺で盛大に
6面　このよろこびをあなたとともに：9支・大法寺 廣田弘子さん
7面　5支・東京常磐布 婦人会が清護寺へ支援助行、6支・埼玉布 こどもお会式を奉修
8面　門祖日隆聖人物語⑨、ニュース短信

第４回青少年の一座　盛大に！
８月４・５日に新講有のもと本山で奉修

二〇五二名の青少年が本山へ
青少年グローバルネットワークも発足する

去る八月四日、五日の両日に亘り、第四回青少年の一座が京都本山・宥清寺を会場に奉修された（四日は前夜祭）。前回大会までの大成功奉修の成果として、参詣者数は申し込み段階で過去最高を記録し、各種事前企画とあわせて盛り上がりが最高潮に達する中、ついに本番当日を迎えた。

本堂左右に大型スクリーンを設置して一座法要が営まれた

第四回青少年の一座へ　まざまだった。過去大会の参詣者の顔ぶれは、さ　に随喜して今回も期待の中参詣された方、他の会員から喜びの声を聞き、今回こそはと参詣をされた方等、きっかけはさまざまながら期待を胸に本山宥清寺へと参詣の足を向けた。

第三回青少年の一座から三年の時を経て開催されたこの大会は、明平成二十五年にお迎えする門祖五五〇回御遠諱のプレ大会として開催されたもので、第一、二、三、十一支庁がホスト支庁として、昨年から準備が進められてきた。

実行委員会では大会を迎えるにあたり、ＰＲ映像やパンフレット・ポスターによる参詣奨励、インターネットを通じての告知や映像を配信して意欲高揚をはかるなどさまざまな対策が取られた。

また、毎月二十五日の門祖日隆聖人御命日を「世界口唱の日」と定め、各寺院で口唱会が開催され、企画会議や準備ご奉公は連日連夜行われた。

四支庁合同で運営を進める初の試みも、ご奉公者間の異体同心の輪が広がるという良い結果を生み、青少年による青少年のための大会が、直前まで議論と準備が重ねられてついに当日を迎えた。

大会当日は見事な晴天の下、盛夏の暑さに負けない熱気が本山を包み、青少年の随喜口唱の声が、吹き抜けるさわやかな風に乗って京の地に響き渡っていた。

（特集記事は四、五面に掲載しています）

暑さも何のその！真剣に祈りを捧げる

教務局
本年度叙任予定者を発表
権大僧正に川井日陵師が昇晋

宗務本庁教務局（亀井陵師、権僧正に昇晋の六日魁局長）は、このほど師、上座講師に昇晋の八平成二十四年度の権大僧師に対する各叙任辞令の正から四等講師までの叙下付式（叙任式）は、十任予定者を発表した。月六日に執り行われる。

本年度の叙任予定者は、また、僧正昇晋の六師権大僧正に川井日陵師、には、翌日の本山高祖会僧正に吉田日孟師等六師、第三座の宗門式典で辞令権僧正には本庄乗学師等が下付されることになっ六師、上座講師に宮崎正ている。幸師等八師のほか、一等講師に十八師、二等講師に十二師、三等講師に二師、四等講師には八師の計六十一名の予定者となった。

この叙任予定者のうち権大僧正に昇晋の川井日

本年度の叙任予定者

【権大僧正】（一師）
川井日陵　④信常寺

【僧　正】（六師）
吉田日孟　⑥護念寺
岡　日到　⑤法運寺
深澤日奥　⑤乗泉寺

【上座講師】（八師）
宮崎正幸　⑧本照寺
土井淳堅　②清風寺
畑　淳経　②清風寺
鳥田薫泰　⑩不輕寺
山内良鷲　⑪廣宣寺
玉田正見　⑧信廣寺
石岡正則　①金澤寺
藤岡日常　⑩薫常寺
寺谷日恒　⑪青柳寺
西村日明　②清現寺

【権僧正】（六師）
本庄乗学　⑤清流寺
柏　廣法　⑤廣全寺
向井淳報　⑩本法寺
小佐井薫基　⑩松薫寺
川端厚俊　⑩長薫寺
岡居清真　②信光寺

【三等講師】（二師）
曽根現慎　⑨堅信寺
仲　清仁　⑤清雄寺

【四等講師】（八師）
水田廣清　⑤乗泉寺
矢野祥幸　⑨松風寺
マドゥーシャン良潤　④妙深寺
新井誠妙　⑥実在寺
有馬清朋　④妙深寺
岡田法泉　⑤廣全寺
小野山将衛　②日風寺
川端良酉　⑩長薫寺
泉　恒健　②本成寺

【一等講師】（十八師）
浜野信淳　⑩光薫寺
龍野薫若　⑩長薫寺
佐藤薫英　⑩要薫寺
津村清種　①誕生寺
笠村薫修　⑩松薫寺
西村清良　②清風寺
安田昌因　②妙光寺
西村清信　②浄風寺
鵜飼清普　④清啓寺
中野声栄　④本要寺
夏井窓宇　⑧信教寺
清水清康　④妙深寺
吉井淳浄　②浄行寺
増井静明　③本要寺
山内良聴　⑪廣宣寺
小西歓直　⑤乗泉寺
金澤歓一　⑤乗泉寺
金　淳松　②清風寺

【二等講師】（十二師）
吉川淳省　ブラジル法昌寺
山田淳了　②清風寺
高林展孝　④長松寺
秋山歓信　⑤乗泉寺
モライス教竜　ブラジル日教寺
マセド信徳　ブラジル隆昌寺
大岡信元　⑧信廣寺
松本良光　⑪廣宣寺
萱森照薫　⑥顕寿寺
御牧要昌　②圓妙寺
秋山淳清　⑨妙津寺
福岡清耀　⑪正法寺

本山高祖会全国奉納金
奉納のお願い

本年も全国の寺院教会に対して高祖会全国奉納金の奉納ご奉公のお願い状をお送りさせていただきました。

吾等のために大難四ヵ度小難数を知らずのご弘通を遊ばされた高祖大士の大慈大悲の大恩にお報いする万分の一にもと、毎年、本山高祖会の砌に奉納させていただくこのご有志を通して、財の功徳を積むことに励まれ、報恩の誠を捧げられることを期待しております。

平成二十四年九月一日

本門佛立宗・宗務本庁

財務局

川井日陵師の略歴

昭和五年十月生。本籍盛岡市。昭和二十八年六月十五世日晨上人を師僧に乗泉寺でお得度。所化名を「乗恵」といただく。昭和五十年九月横須賀信常寺住職に、また平成十五年九月川崎清證寺住職に就任、今日に至る。

宗門では昭和四十五年より教学講師三期、同五十八年より第四支庁長二期、同六十三年に宗会議員、平成四年には弘通顧問会顧問を、またこの間には講有考試試験官、総合教育委員会委員、企画室室員等を歴任。平成十八年からは本宗参議、同二十三年からは門祖五五〇記念法要奉修本部顧問として今日に至る。

今月の宗門行事予定

1日　防災の日・関東大震災記念日
8日　高祖大士身延より池上に向わせらるる
5日　晋位晋山式
12日　竜の口ご法難記念日
15～17日　本山奉仕「教化親子の部」
17日　敬老の日行事
22日　秋の彼岸会

9月のこよみ

1日　防災の日・関東大震災記念日
8日　高祖大士身延より池上に向わせらるる

「弘安五年壬午九月八日、身延山を立ち武蔵国千束郷池上へ着きぬ（着は十八日）」と御妙判遊ばされる如く、この日住みなれた身延を下りられ、池上へ向わせらる。

12日　竜の口ご法難　「去る文永太歳辛未九月十二日御勘気を蒙る」と御妙判せらるる如くお祖師さま聖寿五十歳の御時である。その遠因は立教開宗の当初にあり、近因は極楽寺良観房との雨乞いである。良観房は衆僧と共に北条幕府の帰依をうけ、雨乞いをしたが雨が降らなかった。かねてお祖師さまを憎んでいたので、雨乞いに負けると、幕府に働きかけ、お祖師さまをほうむりさろうと企だてたのである。表向きは、佐渡への流罪、内々には竜の口の刑場で斬首しようとした。しかし「刀尋段々壊」「刀杖不加」「毒不能害」の経文どおりの現証をあらわされ、お祖師さまの首を切ることはできなかった。

17日　敬老の日
22日　秋分の日・彼岸会
佛立第九世講有御祥月　第九世講有日声上人は明治八年十月十六日、京都下京区醒ヶ井仏光寺下ルにご誕生。父は亀井新五郎・母はとみと言われ、幼名を新一郎と称された。

明治二十九年三月、二十二歳のとき、第四世日教上人を師として出家得度し、現行と改めた。

大正三年四十歳で文能昇進、大正五年には早くも権僧正に叙任された。昭和七年副講有に推戴せられ、昭和十年、日淳上人がご退任。後継を日声上人に譲られた。

日声上人は第八世嗣法を法兄、日歓上人に贈られ（加歴）、自らは第九世講有位を嗣法され、権大僧正に晋まれた。

講有ご在位三ヵ年、昭和十三年九月二十三日御歳六十四歳をもってご遷化になられた。

一言

この夏はオリンピックの報道が加熱気味で、それだけ日本選手団の活躍を目にできたのは喜ばしいかぎりだが、それとは別に、いじめについての報道も連日のようにあちこちから聞こえてきた▼リストラや自殺、家庭内暴力や虐待のニュースが連日のように報道される中で、社会の歪みや人間の業を見せつけられて、子どもはどうしても影響されてしまう。大津のいじめによる中学生の事件のように、それは身近な弱い立場の人間に向かうのだ、一部の大人や社会が行っているように▼いじめの問題、それは親の姿を見て子どもが育つように、親の責任でもあり日本社会全体の問題でもある。先の東日本大震災で絆の大切なことが判ったはずなのに、今や日本のあちこちで家族や学校、友達との絆が切れかかっているとしか思えない▼親から子どもに相続されるのは、目に見えた財産だけではない。親の生き様もまた、子どもに伝わるのだ。たとえ子どもが親の所行を知らなくても、それは良いも悪いも縁となって子どもの心に伝わる。いじめの報道のたびに、まわりにいる大人たちのいいかげんさが浮き彫りになった▼佛立宗では、特に法灯相続を大事にする。親のご信心を子どもに伝え、ご信心を通して他の人を支え助ける。慈悲の心を育てて菩薩として、共に仏を目指す人間になれるよう子どもを育てることこそが肝心なのである。